

# 草庵仏教

第137号  
(発行日)  
2001年11月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638126 西宮市  
小松北町1-2-3  
電話・FAX (0798)  
41-5346  
(発行人) 土井紀明  
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp  
http://members.tripod.co.jp/souan211

## 《 聞法会ご案内 》

- \* 同朋の会 (念佛寺)  
22日午後2時  
.....
- \* 聖典講座 (念仏堂)  
第1土曜日午後3時
- \* 念仏座談会 (念佛寺)  
第3土曜日午後3時

## 人生の目的とは

Q 「生きる意味とはなんだろうかと時々考えますが、よく分かりません」

D 「古来から人間の大きな問題ですね」

Q 「阪神大震災後、多くの人が仮設住宅に入りましたが、その一人の人が「子供を失い、家も家財道具も無くし、私も大けがをしました。こんな辛い目までしてなんで生きていかならんのかと、つくづく思う」と語られたのをテレビの報道番組で見ましたが、何か人間の底にある問題を浮き彫りにされたように思いました」

D 「人生が順調に運んでいるときは「何のために生きるのか」などということはほとんど考えもしなかったけれど、不幸な目にあったり辛い目にあったりすると、「人生とは何か、何のために生きねばならないか」という、人生の根本問題が浮かび上がってくるのです。こうした大事な問題をかかえていながら、日頃はそれを真剣に問うことをしないで生きているのです」

☆

Q 「そういう意味では人生苦は人生の根本問題に直面させる縁になりえるのです」  
人生の目的は何かということ

ですが、「人生の意味も目的も分からないけど、今が楽しく面白ければそれでいい」という考えがありますね」

D 「人生の目的や意味を考えても分からない。それより今を楽しんでいたい、ということなのでしよう。ただそういう場合、利他的な快感や楽しみを求め続けると、それが逆に苦痛になる場合が多いですね。おいしいものが食べたい、流行の服が着たい、車が欲しい、恋人がいたら——その他、数え上げればキリがありません。欲望を満たすと、不満や苦痛は解消します。ちょうどそれはのどが渇いたときにコーラを飲めば、スカッとさわやかな快感をおぼえるようなものです。しかし、その気持ちよさもつかの間のものです。しばらくするとまた次の不満や不足をおぼえてしまいます。渇いた時に最初の一口はおいしいですが、飲んでいる内に

に爽快感は減退し、渇きが無くなる逆の苦しいものとなってしまいます。かゆいところを掻かいている快感はやがて痛くなるのと同じです。しばしば欲望の満足は苦痛に変わるのです」

Q 「それに、快感を意識して求めると、期待したほどの快感を

得られない苦しみをしばしば味わいます。

じゃあ利他的な快楽ではなくて、趣味や道楽などは生き甲斐や生きる目的にはならないのでしょうか」

D 「たとえばゴルフやダンスに夢中になつてるときは、ふだんのないやなことを忘れて幸せを感じますが、これも先ほどの快感を求めると同質で一時的なものですから、楽しいひとときが終わってしまえば、やりのこした仕事や、たまった家事や、いやな宿題などと、つまらない現実に戻ります。絵を楽しんで描いていたピカソが、筆を置いたとたん不機嫌になったといわれるのも、そのためでしょう。哲学者のB・ラッセルが「道楽や趣味は、多くの場合、もしかしら大半の場合、根本的な幸福の源ではなくて、現実からの逃避になっている」と言うように、趣味に没頭する楽しみとは、苦痛を一時的に忘れる時間つぶしといえるかもしれせん」

☆

Q 「では戦争や紛争のない平和な社会を実現するために生きるとか、科学者になって科学技術の発展に貢献するとか、医学の研究のために一生を捧げるといような、人類の利益に寄与するようなことのために生きるといのは人生の目的となり生きる意味になるとはいえませんか」

D 「利己的な欲求の満足を求め

るのではなく、他の人々の福祉のために生きることは、己の人生を充実させ、生きる意味を感じさせてくれることは事実です。ただそれは人間の究極の目的とはいえないと私は思います」

Q 「利他的な事業に奉仕することとは生き甲斐にもなり、人生の勝れた目的にはなるけれど、人間存在そのものの本来的な目的にはならないといわれるのです」

D 「ええ私はそう思います。世界平和とか環境問題とか経済改革とか技術革新とか医学の発達とかは大事であり、それに献身にたずさわることが人間として尊いことです。ただそれらのみな「人が生きる」という環境を整えることであって、環境はよくなつても「へにもかかわらず、人は何のために生きるのか」という大問題がどうしても残るのです」

☆

Q 「社会の平和とか経済の安定とか技術の進歩とかいうものは人間の生きる環境を整える事であり、そこにはなお根本の問題が未解決であるといわれますが、その点をもう少し話してください」

D 「たとえば、戦争が無くて平和な社会になったとします。たとえば今の日本のようなものです。サッカーの選手でユーゴスラビア出身のストイコビッチが日本に来たとき「日本はなんて

平和な国なのだ」と感嘆したそうです。ユーゴは内戦のくり返しでしたからね。たしかに日本は平和です。内乱も紛争もありません。でも（さあ君は平和な日本の社会の中で何を目的として生きる？）という問いはいつまでも残ってしまうのです」

Q 「科学技術の発展はどうですか」

D 「同じです。科学技術の発達で生活は便利になりました。電車や自動車、それに洗濯機や電話などはみな科学の恩恵です。しかし便利になっても、その便利な生活環境の中で（さあ君は何のために毎日を生きるのか）という根本問題は未解決のままです」

Q 「医学の発達はどうですか」

D 「医学でも同じですね。どれほど医学が発達し、病気が治り長生きできるようになっても、健康で長生きしている人生そのものの意味が不透明であるという問題が、現代の日本人の一番深いところにある問題ですね。

こんな話を聞いたことがあります。臓器移植には費用が一千万を超えるといわれます。ある心臓移植を受けた男性が、何がしたいかと問われて（ビールを飲んで、ナイターを観たい）と答えた。また、多くの人の善意の寄付によって渡米し、移植手術に成功した人が、仕事もせずにギャンブルに明け暮れ、周囲を落胆させた」と。

臓器移植はよいとしても、何か深く考えさせられますね」

Q 「現代医学では一分一秒、人間を生かすことが目的ですが、医学は（生きる意味・目的）は教えませんか」

D 「ええ。今日、医学が発達して長寿が当たり前のようになってきました。このこと自体は結構なことですが、ただ長寿はいいんですが、何か生きてる中身が空疎くうそな感じのするご老人が多すぎるような感じがしてならないのですが。そう感じてしまう私の方にかたよりがあるのかもしれません」

☆

Q 「政治や経済が安定し、科学技術や医学の発達によって便利で健康で長生きができるようになってからも、なお根本的に大事な問題が残るのです」

D 「食うことも着ることも難しい社会では当面の課題は衣食住の確保ということに焦点を当てればよかったです。ところが今日の日本や先進諸国では、そういう問題がほぼ解決されてきますと、むしろ（生活するのには楽になった。さあ君はなにを結局のところ求めて生きるのか）という問いの前に否おうなく立たされるようになります」

Q 「ということは、生きるための材料は調ったけれどもそこから真に生きることをしようとせず、更なる生きるための好条件を得るために、今なおエネルギーの大半を注いでいるということですね」

D 「ええ、ちょうど向こう岸に渡らねばならないために船を造って準備をする。その船が立派にできあがった。けれども、だれもその船に乗って向こうに渡ろうとしない。しかもまだ、もっと良い船を造ることばかりに心が向いている、そういう状況ですね」

Q 「現在の日本では立派な船はできあがった。けれども乗ろうとしない。そういう状況なのですね。それは生活環境は整ったけれども、自分は何を目的に生きるのか分からないし、分かるうともしない。ただ（とりあえず生きるだけ）（死ぬのもイヤだし仕方がないから生きるだけ）（そんな難しいことはお断り、今結構楽しいから）ということろに足踏みしている。そういう状況なのですね。

それでは仏教で、人生の目的をどう教えているのですか」

☆

D 「経済改革や学問研究や社会福祉や趣味なども、人生の目的にはなりません。しかし、それらは一回限りの二度とない自己人生の究極的な目的にはならないと思います。ただそれらは、私が生きる途上の目的にはなりません。ちようど歩き続けている途中で、（あの山の松の木まで歩こう）とか、（峠とうげの先に見える白い家まで歩こう）とかいうように。

しかし、（歩くことの全体がどこに向かって私は歩くべきなのか）が分からなくてただ歩いていくだけなら、それは歩いていくというよりさまよっているにすぎません」

Q 「人生の途上でいろいろな当面の目的や目標を持つのは良いが、人生全体のつまるところの目的が大事なのですね」

☆

D 「ええそうです。その目的を仏教では（一人一人が迷いを転じてサトリを開く、すなわち仏に成ること）といっています」

Q 「成仏が自己の究極の目的であるといわれるのです」

D 「ええそうです」

Q 「サトリを開いて仏になるというのはどういうことなのか、分かりにくいのですが、もう少し分かりやすく言ってください」

D 「今日的感覺で誤解を恐れずにあえて言うなら、純粹で尊い自己を実現すること。真実の自己の実現と言ってみたらどうでしょう」

Q 「そうすると今の自分は自分でありながら、まだまことの自己を実現していないというのです」

D 「ええ、花の種は土壌どじょうにまかれていても、花が開かないまま枯かれる事があるように、せっかく人間に生まれてきても、真の自己の実現がなされないままに終わってしまいます。裏から

いけば真の自己を失ったままであるということ」

Q 「自己でありながらまことの自己を失ったまま人生が終わってしまうのです」

D 「ええ。しかも真実の自己を失ったまま平気な人間です。著名な思想家のキルケゴールが

『本当は最も危険で最も悪いことと即ち（自己自身を失うこと）が、世間ではまるで何でもないと、世間ではまるで何でもないことのように平静に見過あやごしにされている。これほど平静にすませる損失はない。腕一本、脚一本、金5ター、妻等々を失ったら決してただでは済まされぬ』

と述べているように」

Q 「どうして自分を失っても平気なのでしょう」

D 「私たちは自分以外のことをあれこれいぶん問題にしますが、めったに自分自身を問題にすることはありません。これもキルケゴールが

『自己というものは世間で問題にされることの最も少ないものである』と

Q 「真の自己を見いだして生きる、そこに真の自己実現があり、その自己実現が完全に成就した方が仏であるといえましょう。浄土真宗ではそういう成仏の道を本願念仏の法として説かれて

（了）

# 歎異鈔 第十一章 第五講

誓願の不思議によりて、たもちやすく、となえやすき名号を案じいだしたまいて、この名字をとなえんものを、むかえとらんと、御約束あることなれば、まず弥陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて、生死をいずべしと信じて、念仏のもうさるるも、如来の御はからいなりとおもえば、すこしもみずからのほからいまじわらざるがゆえに、本願に相応して、実報土に往生するなり。

(歎異鈔第十一章より)

(現代語訳)…………… 阿弥陀仏は、誓願の不可思議なはたらきにより、たもちやすく称えやすい南無阿弥陀仏の名号を考え出してくださり、この名号を称えるものを浄土に迎えとろうと約束されているのです。だから、まず一つには、大いなる慈悲の心でおこされた誓願の不可思議なはたらきにお救いいただいて、この迷いの世界を離れることができる信じ、念仏を称えるのも阿弥陀仏のおはからいであることを思うと、そこにはまったく自分のはからいがまじらないのですから、そのまま本願にかなって、真実の浄土に往生するのです)

阿弥陀仏の本願とは「名字をとなえんものを、むかえとらん」という御約束、すなわち「念仏往生の願」です。この念仏往生の願である「弥陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて、生死をい

ずるのであります。

〈生死をいずる〉とは〈生死出離しゅつり〉といつて仏教の根本目的とするところですから。仏教の目的は、生死の迷いを離れて覺りを開くのであります。

その道に自力聖道門あり、他力浄土門ありで、私も愚鈍の身においては他力浄土門あつてこそ生死の迷いを出ることができなのです。

他力浄土門とは、弥陀の大悲大願の不思議によつて救済される道です。大悲大願の大とは、さわりなく弘く一切衆生を救い、その救い内容がゆたかで甚だ勝れていることを表しています。

さて、念仏往生の道において一切衆生を生死出離せしめる、それが他力浄土門ですが、ここでいう〈生死〉とはなにを意味しているのでしょうか。

私たち凡愚の身においては、人生とは要するに〈生死愛憎の人生〉といわれています。迷いの心から、我と我がものに執着しています。我を実体化し、実体的な我を身心の上を感じているのです。身と心の全体を我と思ひ、我ありと執し、我が身・我が物が物に執着しているのです。我が身に執着するゆえ、生を愛し死を憎むのです。

凡夫は、生を愛し死を憎んでいる自分にとつて、都合の良いものを得ると喜び、都合の悪いことにあえば腹を立て嫌悪するのです。そこからさまざま煩悩が起こつてくるのです。

生を愛し、生の確保に都合の良いものは、財産であり、健康であり、有利な地位であり、名声などであります。財産が豊富であれば生き延びるに有利

です。健康であれば生き延びるのに有利です。社会的な立場が高いと生きるのに有利です。評判が良いと人も寄つてきて生きるのに都合が良いのです。そのように愛すべき我と我が身にとつて都合の良いものを甚だ愛好するのです。これが煩悩の心です。

また自分にとつて都合の悪いものには怒つたり、都合の悪い対象を憎んだりしています。

それはまず死を憎むゆえに、病氣や貧困や不利な社会的地位や悪評判などを嫌悪します。病氣は死を引きつける縁となりますから、これをいやがります。金銭的に貧しいと、食えぬようになるのではないかと不安が増大しますから、これらはなだ憎むのです。社会的に不利な立場に追い込まれますと、世間の人から敬遠されて、仕事もうまくいかず、生きるのが困難になりかねませんから、社会的地位の低下を恐れ嫌います。これも煩悩です。悪評判も同じです。

また生と死とは相対概念ですから、生と死を分けるように、自と他を分け、自他の間に分けへだてをする意識として、〈生死〉の言葉のなかに〈自他〉を含んでいます。

自と他の分離意識の問題では、ことに人間関係における煩悩が顕著です。

自分をどこまでも愛着し、自分を愛する限りでの都合のよい他者を好む、けれども自分に反対し自分に逆らうものを嫌って憎み、排除していく。好きな人嫌いな人、それ以外はどうでもいい人という風に、自分を中心にして自分を愛する上からしか他者を見る事が出来ない。そ

ういう人間観が生まれ、このような人間関係で生きるのが凡夫の姿です。

このことは単に個人上だけでなく、自分たちのグループや集団や民族などにまで広がっています。自分たちと自分たち以外の間に愛憎の対立が生まれ、他を排除し憎しみあっています。自分たちと異なる文化や宗教や政治体制であればそれだけで嫌悪する感情を持つのは恐ろしいことです。そういう感情が本になつて、他のグループや民族などにたいする偏見や悪しき思いこみが増大します。その上経済的な利害などが結びつくと、この嫌悪感や憎悪にまで燃えて、やがては相手を抹殺するという、そういうことが世界のいろいろな紛争の現場で起こつています。アメリカのテロ事件や中東問題などが社会化しているのを感じます。

さて、そういう生と死、自と他を分別して自我中心的な立場から愛憎する人生。それを〈生死〉という言葉に収めて、その生死愛憎の生き様を出離し、生と死を一如と見、自と他を一体の如くに見ることのできる仏陀の智慧(さとり)を成就する、それを生死出離といふのです。

阿弥陀仏は一切衆生を生死出離せしめたいと願われ、五劫に思惟し、永劫に修行して、一切衆生をして生死を出でしめる法を完成されたのです。それが弥陀の本願であり、全ての衆生に働きかけてくださっています。その本願が私どもに極めて具体的な救いとして回向されたのが〈念仏往生の願〉であります。(了)

# 信仰夜話

後生が心にかかり広く厚信者を尋ねて法を求めんため北国より関東に向いたる同行、相模まで来たりたるに一信者に逢いたれば、心中の趣き申し出たるに信者のいわく。

汝は領解の石垣積みにあらずや。折角精出して石垣を積み構え、安心して寝ていても、一夜大津波が起らば石垣も城も一時に流失せん。その時に残るものは天上の月一輪なり。領解の石垣安心の城は、如何に堅固なりとも、臨終の大津波には忽ちに碎かるなり。その時になりても少しも変らず動かぬは、御慈悲の月一輪のみ。ただ仰せ一つが真実なりと。

(禿義峰編「安心小話」より)

後生の問題いわば未来永遠の我が身の行く末を案じての聞法に志してきた北陸あたりのある同行が、関東の相模まで厚信の信者を訪ねた。その時の話であろう。訪ねた同行が、心中の趣きということだから、自分の現在の真宗領解を述べたのであろう。

それを聞いた厚信者の答えが厳しくも有難い。

「汝は領解の石垣積みではないか」と。「私はこう了解しています。こう思っています。こう信じています。こう考えています。こう受けとっています」という風に、自分の受けとっているところを述べたのであるが、受けとっている全体が石垣を積んだようなものだといわれる。

「私はこう理解しています。こういただいています」というものが全てが、自分の側にため込んだものではないかとの厳しいご指摘である。

それらは、真宗の教義を聞いて受けとった教義概念ないしは真宗思想として記憶されたものであろう。あるいはいろいろ真宗を聞いていて途中で感激した話の集積であろう。

これだけ熱心に聞いているお同行だから、真宗の教義に関する話は山ほど知っていると思う。

しかし、真宗の話で知っていることもおぼえていることも、聞いて感激した話のかずかずも、それらは積んだ石垣のようなものである。

大津波が来ると石垣はたちまち砕かれて流失してしまうように、何か縁がくると、積み上げた領解は壊れて無くなってしまう。そのように、出来事にぶつかると、聞いておぼえた真宗の話が間に合わない。特に臨終近くになると、どこかへふっ飛んでしまうのであろう。大津波のあとは無惨な跡のみ。

もう自分の心の中にはこれといってしつかりしたものは何一つ残っていない。あれだけ聞いた真宗の教えはどこえやら、元の木阿弥になる。ただ真宗教義だけが空回りするばかり。

さあそうなってみると何が残る。大津波で石垣が流されると何が残る。

ただ天の空に月が一輪輝いている。大津波にも流されぬ月が光っている。お慈悲の月である。

私の心中が火事場のごとく、津波の跡のごとく空っぽでも、ただ天上の月一輪

が残ってくださる。月一輪とは「汝を助ける」の弥陀の仰せである。この仰せ一つで生死を超えさせていただけける。仰せが真実である。木村無相師の遺詠に

「生き死にの

道はただただナムアマミダ

ただ称えよの仰せばかりぞ」

とある。「ただ称えよ」「助くる」の仰せ、この仰せが生死を超える道となりたもう真実である。

真宗を学ぶということが、たんに真宗を思想的・教法的に学んで分かって、それで「能事終われり」となってそこに腰を下ろす。へこう理解しました、こう受け取りました、このように分かりました」というようなところで満足してしまうなら、このお同行と同じである。

真宗を思想的に学ぶのは過程的には良いとしても、真宗の信心は教義や思想の了解とは違う。「分かったこと」と「信心」とは似て非なるものである。そこには大きな断絶がある。

その断絶が苦になってこの同行は全国を尋ね歩かずにはおれなかつたのである。

「少しも変らず動かぬは、御慈悲の月一輪」にであうまで、香樹院師が「これ一つ聞きつけずば置くまいの心がゆるんだら、仏になる種を失うたと思え」と申されたように、聞きつけていきたいものである。

(了)